福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

ルーアン探訪記

ルーアンは、モネが住んでいたジヴェルニーから少し離れたセーヌ・マリチーム県の都市である。ルーアンでは、木造 5 階建ての建築群が軒を連ね、美しい街並みが形成されていた。大きな時計台が、市のシンボルとして有名である。北フランスのノルマンディー地方にあるこの都市の気候は、低温・低湿であって、風化・劣化が起こりにくいこと、また地震などもないので、建造物が良く保存されたように思われた。ルーアンのノートルダム大聖堂は、フランスのゴシック建築を代表する荘厳な教会である。11 世紀に建設が始まり、何世紀にもわたって増改築されたようである。19 世紀に完成した尖塔は、高さ 151 メートルもあり、フランスで最も高いものという。ノルマン人で初代ノルマンディー公になったロロの墓があり、内部空間は、かなり広いようである。【光の画家】といわれるモネの中期の連作『 ルーアン大聖堂』は、この聖堂を主題としたものである。その壮麗さと広い内部空間の趣は、目を見張るものがあった。午前中の訪れだったが、午後だったら、光の影響で、その趣も微妙に変わることも体感できたかもしれない。

聖ジャンヌ・ダルク教会は、15 世紀の英仏百年戦争でフランスの勝利に寄与したが、イギリス軍の捕虜となり、異端者として火刑に処されたジャンヌ・ダルクを祭って、旧市内広場に建てられた教会である。ジャンヌ・ダルクその人は、異端からの復権がされているようだ。教会内部には、大きなステンドグラスがあった。それにしても、わずか 10 代の少女が、如何に神の啓示を受けたとはいえ、滅亡寸前のフランスを救うきっかけとなるとは。人の共通感情に訴える信念と情熱が人を動かすものかなと、感心した次第である。

平成 24 年 6 月 23 日
短歌：
フランスの救国栄華祈りつつ火の中の乙女何を思わん
令和 3 年 3 月 10 日脱稿
自由俳句：青い空時代を超える生の歌

活性化とエネルギーと人材

最近、色々な意味で、人口減少と高齢化による過疎化した地方の活性化、これまでうまくいっていたが劣化が起こって機能低下した組織の活性化、被災して日常生活にも不安を残す地域の復興・復旧と再活性化、伝染病などで心の病と孤独感に悩む最近の個人の夢と希望を取り戻させるための活性化などが喧伝されているようだ。その時、それを実行するためのエネルギーと人材を考える必要がある。

物質・材料について考えると、化学物質や半導体などが、基底状態または不活性な状態から、励起状態または活発な反応状態に至るには、光吸収や熱などの形で活性化する必要があるが、そのためには、それなりに、活性化エネルギーが提供されることが必要である。この活性化エネルギーは、結構大きく、それを下げるために、触媒を用いて、シャント・パス（近道または横道）を考えることもあるようだ。

他方、人間の社会形態の活性化のためには、それなりの何らかのエネルギーを必要とする（情熱と継続性とも関連するかもしれない)。また、人の世では、活性化のためには、それを支える優秀な人材が必要になるのは、異論を待たない。財源の確保ということも大切であるが、先ず、そのためのエネルギーと人材が重要になってくると考えられる。

平成３年３月７日

自由俳句：活性化光劣化の可視化にも必要不可欠なりエネルギーとして